

津山城は慶長8年(1603)に構築され、明治6年(1873)取り壊された。  
 元禄11年(1696)松平長矩(十万石)の居城となり、明治6年まで続いたが老朽化が進み撤去された。  
 その際、この腰高障子は長法寺に委譲された。障子は二連(一連4面)のうち一連にアジサイの絵が描かれている。今一連はオオデマリと思われる。絵は狩野派の絵師によるものと言われている。  
 アジサイは腰高障子委譲を記念して明治初期に植えられ、昭和30年頃から増殖、現在4000株になり、“あじさい寺”として親しまれている。

拝観は予約を要する。

アジサイ図 長法寺・襖障子  
 (平成13年津山市重要文化財指定)

長法寺 岡山県津山市井口246  
 ☎086-22-6436



酒井抱一(1761~1826)  
 姫路城主・酒井雅楽頭(ウツカミ)酒井忠恭の第二子で俳諧・浮世絵などに傾倒し、寛政9年(1797)剃髪して西本願寺派の準連枝(本願寺法主一門の称)となる。法名を等覚院文詮暉真という。絵は俵屋宗達・尾形光琳らの系統で、特に光琳派の筆法が特色。好んで花・草を描いた。

この軸には暉真の印があり、寛政以降の作と思われる。

(個人蔵)

第10号 あじさい

2003年6月1日発行・発行 日本アジサイ協会

事務局 〒173-0037 東京都板橋区小茂根5-3-11 杉本誉晃方

日本アジサイ協会事務局

TEL 03-3956-8423

東京三菱銀行 荏田支店

FAX 03-3530-7707

口座番号 普通 0481343

THE JOURNAL OF THE NIPPON HYDRANGER ASSOCIATION

第10号



日本アジサイ協会

Vol. 1 No. 10

2003.5.10

アジサイを訪ねて(第4回) 美方八重



大型の八重花。通常栽培すると花色も薄いものだが、4~5年作り込んだものを芽だし肥料として燐酸分の多い肥料を与えるとわずかに赤色が出て色が濃くなる。但し若木には花色が赤くなり適当ではない。他のアジサイにも応用できる。

提供: 浜田昭文

# 『花時間』 6月号の巻頭は アジサイの大特集です

『花時間』誌上初めての  
26ページにも及ぶ  
アジサイの特別企画

第一章 移ろうあじさいをあしらう

あじさいの色を愛でる

第二章 アレンジからクラフトまで

秋色あじさいを楽しむ

第三章 こんなにあります、アジサイ図鑑

あじさいの素顔を知る！

第四章 アジサイの名所を紹介

あじさいの魅力に会いに行く



毎月7日発売

『花時間』は花からはじまるライフスタイルを提案している雑誌です。花あしらい、グリーン、インテリア、雑貨、旅、おしゃれ…。花と花のある暮らしを楽しむためのあらゆる情報が満載です。

お近くの書店にてお求めください。

書店にない場合は  
(株)角川書店  
受注センター読者係まで  
平日9～12時、13～17時  
(土・日・祝日を除く)

049・259・1100

年間定期購読をご希望のかたは  
上記の読者係までお問い合わせください。

第10号発行の巻頭にあたって

## ☆ 私見、日本アジサイ協会の今後と展望

副会長 池田正弘

昨年11月26日に山本武臣会長が逝去されました。ご承知のように日本でのアジサイ研究の第一人者であり、当協会の創立時会長でもあります。協会の創立、存続が故山本会長個人の力に負うところが多かったことは誰しも依存が無いところと存じます。高齢を理由に前期（アジサイ研究への情熱は揺るぎなかったが）、会長任期の終了を控えて早々と辞任の意向を表明され会員数の減少を招き、御本人も考えるところがあったようです。

雑談中、よく冗談交じりで故会長は自分がいなくなったらアジサイ協会はどうなるんだろうかとおっしゃるので、その時はきちんと解散しますから心配はいりませんと申し上げて大笑いしました。

が、アジサイは日本在来の植物であり、今国内はもとより国外においても大変関心が寄せられており、新品種も続々と発見され、それを基にした素晴らしい交配種も発表されています。また、アジサイの品種、分布等未解決の問題も多く抱えています。

こうした状況の中、日本アジサイ協会の存在意義は益々高まっています。この先、国内外のアジサイの情報に対応し、今まで以上に学術研究に助力をし、普及、紹介に努めて行かなければなりません。植物学の豊富な知識を有し外国との対応にも通じているというような方にも役員として協会の運営に協力していただきたいと願っております。もちろんこうしたことは会員の支えあってのことです。「私見」とさせていただきますが多くの役員、会員の方々同じ思いと存じます。引き続き協会への御支援を賜りますようお願い申し上げます。

なお、今回の会報は故山本会長を偲び、感謝と御霊の安らかならんことを祈り山本会長追悼号とさせていただきます。



在りし日の故山本武臣会長



調布市にある神代植物公園での「アジサイ展」



相模原市人口60万記念・マレさん、カナダ大使と。

## エゾアジサイについて

副会長 藤井 清

海洋国の日本。かつては大陸の一部であり島々が点在していた。その後の地殻変動によって列島が形成され、ほぼ現在の形になったのは凡そ 100 万年前のことである。

そこに自生する植物は大陸系のももあり独自のものもあるが、しかし島国であるわが国では独自の形で進化、適応性をもって現在に至っている。北は北海道から南西諸島に至るまでの自生のアジサイ属の遺伝子的調査は始まっているが、それとは別に実践的な面からアジサイを取り上げて見たいと思う。

その中から謎の多いエゾアジサイを検証してみよう。

わが国は農業国であった。アジサイの花が近くで咲いていたとしても農繁期には関心が無かったのは事実であり、ごく一部のものにしか観賞されなかった。江戸時代に入ると薬草(毒草)の一つに加えられ観賞的な植物より、より身近になったのではないだろうか。園芸技術も進み、移植・増殖が可能になると栽培されるようになり、仏事的なものにアマチャが使用されるようになった。

地方の寺院の裏庭などには、半ば野生化したアマチャを見ることがあり、ヤマアジサイよりもアマチャが通用する。

日本海側の、しかも豪雪地帯に自生するアジサイをエゾアジサイといい、その特異性からその名が定着しているが学術的にはヤマアジサイの亜種として取り上げられている。

では、その特異性を現地の状態から考えてみよう。

### ①土質

一般に、硬質泥岩・凝灰岩・礫層などによって形成されており、山々の稜線がなだらかに

保たれ、隆起によって生じたものといわれている。新潟の<sup>あけた</sup>深田というのも水持ちのよい土壌を指しているのでは無かろうか。

### ②降水量

年間を通じて降水量は多く、特に冬期に多いのは豪雪地帯であることを意味し、根雪は 5 月頃まで残る地帯がある。



### ③日照

降水量が多いということは、平均的な日照時間も短くなり、比較的晴天の続く春と夏の如何によって作物の収穫に影響が出る。

### ④風

海岸に近いこともあって日本海の影響を受けやすく、寒冷前線・温帯低気圧の通過によっては気候が大きく変わり、フェーン現象・突風が生じることがある。(十日町市史・資料編 自然、津南町の自然より)

こういった苛酷な環境の中で生育するエゾアジサイは、自然の変化に適応する能力を持っている。

### (1)枝に弾力性がある。

豪雪の重量、雪崩に耐えられるように弾力性があり雪解けとともに起き上がる。(枝が六角形であるという定説は適当でない。株元からの新しい枝(シュート)は直立しよく伸びる。

### (2)根が多い。

水量が多ければ根が少なくても良いと考えられるが、エゾアジサイは地中深く伸びる直根は兎も角、地表近くに展開する細根は多い。

### (3)葉が大きく、薄い。

日照時間が少なく、春、急速に展開する。色も薄いが濃緑色のものもある。葉柄が赤くなるのが特徴。

### (4)花期が早い。

現地では 7 月頃だが、栽培するとヤマアジサイの花期と前後する。

### (5)澄み切った花色。

エゾアジサイ特有の青色を基調とするが、白花、紫赤色のものもある。

両性花が白く、てまり花では不燃花にもその特徴が現れるものがある。

開花初期に装飾花が濃い黄色のものがありよく観察したい。

### (6)花形

装飾花は他のアジサイと同じように丸弁、鋸葉、重弁のものがある。

別に、新しく伸びた枝にも花が付く特筆すべき種類があるのは注目したい。

以上のような観点に注目して栽培に入ってみよう。

### (a)露地栽培

#### 1.土壌を調べる。

粘質土は少量のピートモスを加え深く耕す。(ピートモスは無調整のもの)

砂地は石ころなどを取り除く。

家屋近く、コンクリートの近くは避ける。(花色の関係)

#### 2.植え場所

西日の当たらない落葉樹の下。

池の側。

樹間の明るい場所。

組石の間に植える。(植栽後石を置くこと

も、適度な湿りと地表の温度を下げる効果がある。)

### 3.株間をあける。

根はよく張るので株間は十分にあける。

### 4.肥料

緩行性の 3 要素(苦土の入ったものは不可)の等量の化成肥料を春、秋に施肥。

油粕に少量の骨粉を混入水で軽く練って置肥する。葉の色をみて適度実施する。

### 5.灌水

土壌の関係で一概にはいえないが、葉が萎れるのが目安。夏はよく見て灌水しないと落葉することがある。

### 6.剪定

植え付け後 2,3 年は剪定をせず株の充実をはかる。(開花後の花は切り取る)

### 7.管理

冬期に枝枯れを起こしやすく保護が必要で、枝を束ねて紐で軽く縛り、藁、寒冷紗で覆って防寒をする。

露出した根は土をかけるか、ピートモスでマルチングする。

### (b)鉢栽培

エゾアジサイの鉢植えは難しく、市街地での栽培は不可能に近い。しかし挑戦を試みる必要はある。

#### 1.用土

鹿沼土・赤玉土(ボラ土・日向土)を等量のものを使用。

#### 2.鉢

駄温鉢、ポリ鉢の中深のもの。

#### 3.植えつけ

最初の鉢は小さめのものを使用し、鉢底から根が長く伸びれば切り取り、少し大きめの鉢に植え替える。(鉢ゆるめ)

植え替えはこまめにするほど成績が良くなる。

#### 4.肥料

前記の肥料を使用する。肥料は少量を葉の状態を見て、葉の色が薄くなれば追加する。

#### 5.灌水

環境によって異なるがこれも葉の状態を見て灌水する。花期は特に乾燥するので日陰に移して灌水する。(葉焼けは病気の原因ともなり易い)

#### 6.管理

日照を調整する。強い所は日陰、或いは寒冷紗で遮光する。

冬期の寒風は枝枯れを起こしやすいので、陽だまりの暖かい場所に移動するか、防寒処置を考える。

冬期といえども灌水は必要、暖かい日を選んで灌水する。

#### (c)消毒

本来、アジサイは病害虫に強く放任されがちだったが、害虫の被害は別として、病菌による被害が多くなってきた。害虫を駆除すればこと足りるが病菌となると厄介な代物である。

葉の厚いガクアジサイでも炭素病など細菌性の病気に犯されると瞬く間に蔓延する。特に夏期に入り気温が上昇すると被害がひどくなり葉を摘み取らねばならなくなってアジサイのその後の生育に影響を及ぼし兼ねない事態になってきている。最近では強力な殺菌剤はなく予防的な薬品しかなく、兆候がなくとも薬剤散布の必要性が高まっている。

もともとアジサイ自体から発生するものではないと思うが、栽培場所以外に発生源があって飛び火してきたとなれば手のつけようがない。

消毒薬散布は表面だけでなく、葉の裏側に(さび病など)発生することもあり、裏側にも注意してみなければならない。最近の薬剤は薬効も短く、いったん雨が降れば流されてしまう。こまめな散布が大切だ。

冬期に落葉を整理して石灰硫黄合剤を散布

すると病害虫には効果的であるが、建て込んだ住宅地では近所回りに迷惑が掛かることもあり、注意しなければならない。

#### (d)増殖

一般的な挿し木による方法が考えられるが、エゾアジサイの挿し木は春挿しか、秋挿しが成功率が高い。通常の梅雨頃の挿し木では枝の充実度が薄く、中心の髓すいがなくなり失敗することが多い。

実生による増殖も考えられるが開花までに3年以上かかり一般的でなく、現地で採取した種子でないと意味がない。

終わりに、現地でのエゾアジサイの生育過程は通常のアジサイにくらべ1~2ヶ月短く、雪解けとともに急速に成長し開花する性質を持っている。したがって山を降りると生育過程が狂い、それが栽培困難な要因となっている。

一方、積雪下にあっても潤沢な水分に恵まれ、地下部分(根)は成長を続け株の生育を計り、萌芽力の増強にも繋がる。事実、新しい枝(シュート)にも開花がみられる現象は冬期に蓄えられたエネルギーの発散であると考えられる。

エゾアジサイはオオアジサイともいわれるように、大型な種類が多いが、中には小型の種類もある。妻有庄と名づけられた種類や小千谷市で見出されたもの(写真参照)は、矮性であり、前年の枝は枯れても株元の芽が伸びて先に開花する現象を持っており、必然的に草丈が短くなって小型化した傾向になったものと考えられる。

妻有庄の栽培は比較的容易であり、挿し木の増殖も可能なので鉢栽培には活用範囲が広い。ただ、枝が柔らかく取扱いに注意する必要がある。

以上、エゾアジサイの実態、栽培方法を提示したが、あくまで目安であり各自の栽培努力に期待したい。(資料は十日町市・多田滋氏提供による。)

感謝敬白

## 《越後冬景》

1999年・十日町~六日町の峠から



十日町市周辺の冬景



善機山



雪解け時に現れたエゾアジサイ



八海山(1755M)遠望



西洋アジサイの冬囲い

アジサイは積雪の重みに耐えられず折れる。縛って保護する。



小松原(この山の後ろは苗場山)

《エゾアジサイ》

藤井 清



濃色テマリエゾアジサイ  
(小千谷市産)



実生三品種

幾分赤色の発色がみえる左を実生してみると、三色の花色が生まれ、寄せて撮影したもの。発色の参考になれば幸いである。



子連れテマリエゾアジサイ  
(新潟産)

多くの装飾花がつき、先から次々と開花する。



開花初期



七分くらいの開花

長野県にエゾアジサイを訪ねて

理事 秋田 宏

3年程前に宮前さんからエゾアジサイの写真を送って頂き東北巡りした時より、多くの種類がありビックリ、是非一度行きたいと思い、やっと今年7月4日須坂の宮前(会員)さんを訪ねることが出来ました。



裏の10間以上ある土手をガクアジサイが埋め尽くし、その前の広い畑にガク・山・蝦夷・西洋アジサイが見本園のように植えられ、そのせいか、



甘茶の自然交配種が生まれたとか。話が弾んで、山(自生地)には行けず地図で教えて頂いた自生地の場所をしるして宮前さん方を失礼する。

7月23日長野・斑尾高原へ、山頂まで家が建ちにぎやかでこんな所にアジサイなんてあるのかと思った時、左の土手にわずかなエゾアジサイを見つけるが終わりかけている。15日頃が最盛期と見た。通行人に聞くと頂上付近を一回りすると庭や空き地にあるとのこと、しばらく行くと染色教室の庭のまわりに自生か植えたのか10株程の大株があり、主人に断って写真を撮る。さらに進むと起伏に富んだ空き地に10株程ある。早々に引き上げ次の目的地「戸隠」に向かう、野尻湖へ向けてくだる途中、左の土手にエゾの自生があるが、車窓から見たところでは珍しいものはな

く戸隠へ急ぐ。正午戸隠森林公園に着く、横にあるそば屋(そばは長野の名物)で昼食。そば屋で2~3人に聞いてみたが見たことがないと言う。しかたなく、鏡池に向かうが途中エゾノリウツギの群生地だ。1メートルから5メートルまで様々。池は運悪く波立って逆戸隠山が撮影できず、車から降りることもなくその場を立ち去る。野草はシラネアオイ・ヤマシャクヤク・トガクシ・ショウマがある。戸隠流忍法の里でからくり屋敷・手裏剣道場がある。調査不足であとで判った事だが、先の森林公園と奥社にエゾアジサイがあったと言う、残念だが後の祭り。戸隠すわ旅館の林「フミコアジサイ」を見による、庭の周りにヒメアジサイに似た青いエゾテマリ、エゾの特徴の茎が正六角だ。



葉はヒメより大きく大きい。本日は山田牧場泊まり。翌朝5時起床、温泉の朝風呂・朝食をすますと泊まり客全員、といっても10人と女将を連れエゾアジサイ見物に。スゴイ!山の頂上から裾にいたるまで1万株以上の青い斜面は感激だ。目に青く見えても写真では葉も青い花も白く反射して表現できない、マクロ撮影の濃青でご想像して下さい。



★北兵庫のヤマアジサイ★

ヤマアジサイの自生地では自然のいたずらか高い山に行くほど花形に異変が現れてくる。 提供・藤井 清  
 ≪針伏山のヤマアジサイ≫



①四国の虹に似た花模様が出るが丸弁で上品な趣がある。



②鋸歯の粗い装飾花。両性花の盛り上がりがあり雄しべが長く最盛期には優雅な花形になるものと思われる。ピンクに咲かせれば観賞価値は高い。



③いびつな形の装飾花であるが、固定すれば先が楽しみな花となると思われる。



④雪国自生のヤマアジサイにして葉が小さく、多花性の傾向があり花の姿も美しい。



⑤絞りの入った大型の装飾花をつけているが、栽培して絞りが鮮明になれば優品。



⑥不定形の装飾花。重弁花の一種だが固定しにくい面もあり、枝先の更新によって良い面を残したい。



⑦濃青色のヤマアジサイ。栽培して純粋の青が固定すればよいのだが用土に注意したい。



⑧ヤマアジサイは大株になると変化が現れることがあり、良い面の更新が必要だ。



⑨自然界では赤花・青花の同居を見ることがあり、現地の土壌・地下水の調査が必要。

≪扇ノ山のヤマアジサイ≫



①淡青色のてまり花。崖下での自生と思われ、葉柄も赤く花との対比が美しい。



②丸弁の優雅な装飾花は、風車の趣がある。草と同居している。



③白花のてまり花。粗い鋸歯の纏まりも良い。白花は栽培地によっては淡い紅をさすことがあり楽しみである。

◇八丈千鳥◇

<p>2001年開花</p>	<p>2002年6月開花                  培養土、環境によるものか開花も充分でない。花柄は丈夫で一時的な降雨に垂れ下りても起き上がる。</p>	<p>2002年11月の花房                  中央の両性花が次々と開花する。緑変・黒変した装飾花を整理すると約2ヶ月楽しめる。この花はミヤケトキワと対比した写真と同じもの。</p>

	<p>2002年9月 ミヤケトキワとの対比                  八丈千鳥(左)と同時期に開花したミヤケトキワを比べた写真。6月開花と比べると、ガク片が幅広く、花柄はミヤケトキワより長く太い。また両性花は少なく、周辺の装飾花と同時開花するものがあり共に梅雨咲きは青色であり、秋咲きは緑色である。                  冬期10℃以上では常緑で成長し、2~3月頃開花するのはミヤケトキワと同じである。葉は細かい鋸歯があり、肉厚で7段くらいで着蕾する。花色は酸性土ではやや青くなる傾向がある。ミヤケトキワは結実することがあるが、八丈千鳥は種子ができないと思われる。</p>
--	--

根の伸長は旺盛で再三の植替えが必要と思われるが試験栽培を試みたい。  
 アジサイとしては、異色の存在であり今後の研究課題でもある。挿し木時期の調整では年中この花が見られることも不可能ではなく、薄くピンクに色づくのも一興ではなかろうか。 藤井 清

<p>城が崎の盆風作り                  1998年奈良県御所市にて。                  提供・落合氏</p>	<p>美方八重(ミカタヤエ)                  大型の八重花。通常栽培すると花色も薄いものだが4~5年作り込んだものを芽だし、肥料として磷酸分の多い肥料を与えるとわずかに赤色が出て色が濃くなる。但し若木には花色が赤くなり適当でない。他のアジサイにも応用できる。 提供・浜田昭文氏</p>

\*故山本武臣会長を偲ぶ

毎日新聞社の好意により平成9年梅雨期に毎日新聞に掲載された「梅雨の花 アジサイ」を8回にわたり連載致します。

梅雨の花アジサイ①

タブーは戦後に消えた

山本 武臣

間もなく梅雨の季節を迎えると例年、アジサイが話題になる。そして各地のアジサイ寺、名所が見物客でにぎわう。でも、それは戦後の現象である。戦前にはほとんど見られなかった光景である。江戸期から戦前まで梅雨を代表する花といえればハナショウブだった。

アジサイは太古から日本固有の植物だが、何ゆえか昔は取り上げられることも少なかった。江戸期には全国に普及したが、武士道の時代には色が変わるので節操がない、桜のようにパッと散らないので潔くない、などの理由で疎まれた。

一部では縁起が悪いとして嫌われた。バケバナ、ユウレイバナ、ジゴクバナなどの異名もあった。戦後、これらのタブーが取り払われ、いち早く鎌倉の明月院や南房総の麻綿原がアジサイの名所としてにぎわうようになった。これまでに知られなかった品種も発掘され、業者も鉢物として大量に出荷するようになった。

ファン層も拡大の一方だ。アジサイは戦後の出世花のトップであることに間違いはないだろう。

アジサイは万葉集にも2首詠まれている。紫陽花の字をアジサイに当てた平安時代の歌人も花色が紫だからこれを当てたのだろう。紫は平安時代の女性が最も好む色である。

それなのに源氏物語、枕草子をはじめ多くの平安女流の物語の中にアジサイは全く登場していない。これはどうしてなのだろう。大正時代の初期の調査による「日本の花」という記録がある。1月から12月までの代表的な花のリストだが、5月はボタン、6月はツツジとハナショウブ、7月はハスである。

アジサイの名はない。お呼びでなかったのだ。ところが現在、多くの市、町がそれぞれを代表する花を制定しているが、アジサイの登録は約50にもぼる。

最近では成田市の花がアジサイに決まった。市民の圧倒的な支持があった、という。世界への玄関口、成田市。そういえば長崎市の花もアジサイだ。偶然の符合か。アジサイが取り持つ縁で市町村の関係も深まる。

お別れ

告別式 平成14年11月30日

撮影・秋田理事



写真左下に藤井副会長より「八丈千鳥」が

弔辞・荒木副会長



弔辞

山本武臣さん、全てのあじさいの愛好家を代表してお別れの言葉を述べさせていただきます。

秋も深まるに連れ、御様態も只ならぬ事とお聞きし、もしやとの覚悟はしてきた心算でしたが大きな大黒柱を失った思いです。あじさい博士、あじさい仙人、あじさい界の牧野富太郎等々マスコミから畏敬を込めて様々の異名を奉られました。

ヒメアジサイの研究、数多の名花の紹介純白のアナベルに魅了されたひととき、四季咲きミヤケトキワとの出会いの興奮、神代植物公園での展示会、多少の身体の不自由は物ともしない抜群の行動力でした。広く深いその知識は古典から海外の文献にまで及びました。山本さんの歩む道がそのまま日本のアジサイの歴史となってきました。これらの集大成としての日本アジサイ協会の創立、そして会長への就任、研究者から組織運営の責任者へ、新たなご負担は健康への障りを為したかもしれません。しかしアジサイに傾ける熱意は世の常を遥かに超えていました。

アジサイは世間に見捨てられた花だ、誰も研究しようとしないうと常々自嘲される言葉の中に反骨の志しが見えていました。今日のアジサイブームの隆盛を密かに満足されていることでしょうか。

西行法師は桜の下にて春死なむと仰せられました。今日のお別れに臨み、アジサイの花で飾り尽すことが出来ないのが心残りです。

この霜月の晦日、黄葉したアジサイの枝々には来春への確かな芽が息づいています。山本さんの蒔かれた種子は日本アジサイ協会の枠を越えて国の内外にこの先花を咲かせ続ける事でしょう。

頑固で絶対に自説を曲げる事のなかった山本さん。反面、協会の総会や研修会での軽妙洒落な進行ぶりは全く好対照でした。もう目にする事は出来ません。

人生の中葉からあじさいの道を究め、奥様の深い思いやりに包まれての一生はお幸せでした。頑固な山本さんもこの点は頷いて戴けることでしょうか。

最後に山本さんの小説、長恨あじさいものがたりの中でご自身が引用された句を披露してお別れしたいと思います。

雲切れて 彩<sup>ひかり</sup>受けたる 七変化  
長い間ご指導有難う御座いました。安らかにお眠りください。さようなら。

平成十四年十一月三十日

日本アジサイ協会

副会長 池田 正弘

謹白

■編集後記■

会報第 10 号は故山本武臣会長追悼号とさせていただきます。写真・記事で会長を偲び、ご冥福を祈りたいと思います。

今回、藤井副会長・秋田理事の寄稿が期せずして同じエゾアジサイの記事となりました。出遅れの感のあったエゾアジサイですが、これからが楽しみです。もっと多くの情報をお寄せ下さい。

鎌倉のアジサイ

副会長 池田 正弘

梅雨時期の鎌倉はアジサイの花を楽しむ人達で賑わう。アジサイ寺の名で知られる有名寺院は勿論のこと、個人のお宅の庭、切り通しと呼ばれる峠道、鎌倉の風土にあったアジサイはそこそこに見られる。

今回の「鎌倉のアジサイ」は、これらのアジサイ名所の紹介ではなく鎌倉自生のアジサイ（ヤマアジサイ）についてである。

今年（平成14年）拙宅のアジサイ棚の隅で咲いている白花系の一鉢に目が止まった。元来、白花なのだが今年の花はガク片が薄く刷毛で刷いたように青色に染まり、両性花も臍に薄青く色づいている。ガク片は幅広く波打っていて鶴が舞っているようである。思わず「雲居鶴」という名前が脳裏に浮かんだ。総会が行われた大船フラワーセンターのアジサイ展に紛れ込ませておいたが、濃い赤とか青という花とは違って誰の目も惹かなかったようである。中性花のガク片が幅広く波打っているのはよく見かけるし、薄い青は珍しくもないが、気品がある。二、三年作り込んで様子を見てみるつもりである。

この株は十数年前に鎌倉市街の北にあたる山系の谷で、一枝採集したもので現在は六号鉢に植えてある。当初は何株かあったのだが、単なる白花だと思い、鎌倉自生ということで一株だけ残しておいたものだ。数年前に地元テレビ局の取材で鎌倉自生のアジサイを撮影するという事で、採集地を明示したが見当たらないという事であった。あるいは自生ではないのかも知れないとも思いつつ、その後確認する暇もなくそのままとなった。

今年六月、鎌倉市と逗子市との境に近い山中でヤマアジサイを見つけた。前回の採集地は北、今回は鎌倉市の東にあたる。崖から垂れ下がった花はガク片が幅広く前に採集したものとよく似通っている。中性花、両性花とも白色である。すぐ下の谷を見下ろすと群生とはいかぬ迄も、点々と白い花をつけた株が谷に続いていた。ようやく鎌倉での自生を確認できた思いがした。

これらの株のなかで幅広いガク片を持ったものは少数で、ほとんどは少し幅の狭い普通といつてよいものだった。全体に大型で伊豆半島から富士山周辺、また栃木の鹿沼で採集した割合小型の小葉のヤマアジサイとは異なっている。山本会長の話しでは横浜市の金沢から戸塚にかけて同じ型のものが見られたということであった。

事務局 ( . . )

アジサイの青色

土壌のpH濃度によってアジサイの花色が変わる事はよく知られるところである。例年白い花が前述のように薄い青で咲いた理由を考えてみる。格別の花ではないと思っていたので柵の隅の方に置いてあり、秋に落ち葉が積もり鉢を覆っていた。この落ち葉が腐食してゆく段階で弱酸性を帯びて花が潜在的に持つ青色の性質を最大限に引き出したのではないか。豊に落ち葉の降り積もった森林土壌が弱酸性を帯びると同じ理屈ではないかと推測される。プロの生産者、学者にとってはお手の物の酸性濃度の調整もアマチュアにとっては難物である。青色を濃くしようと木酢液を散布すると、時には逆に鉢内の酸性濃度が土壌微生物の働きで中性に近くなり赤紫色に変化したりする。その点、この落ち葉を敷く方法は失敗が少ない。

今年大船フラワーセンターのアジサイ展に山本武臣会長の依頼もあって「青競べ」と称して、

ひとつのコーナーを作らせてもらった。まず会長が八甲田山で見つけた、濃い青エゾアジサイ、次に山陽地方で人気の高い濃紫、そして鳥取の伯耆大山産の青鳳の三種類で構成した。

濃青エゾアジサイは十数年来栽培しており色の出が不安定で、なかなか濃い青色になってくれないが、うまく発色した時は濃い青紫となってくれる。

濃紫は昨年会長が苗を送ってくれた一本立ちの株である。今年事務局の杉本氏からも頂戴し、濃い紫のアジサイではなく、命名が濃紫であることを知った。初めての開花で、まだ未知のことが多いが、確かに名前どおりの濃紫に咲いてくれた。

青鳳は大輪でガク片の先が尖っており上記の二種のガク片が丸みを有しているのに対して剣弁である。三種を比較するに、いずれも甲乙つけがたいが薄青エゾアジサイ、濃紫が紫色を帯びるのに対し、青鳳は青味が強いように思える。まだ栽培して一年間での比較では結論を出すには早すぎるし、これらに優とも余らぬものがまだまだ出てきそうである。

お詫び

第9号の「あじさい」において、記載漏れの箇所が見つかりましたので、訂正とお詫びを致します。

尚、記載漏れの箇所は、上記文章の青い文字になっております